

國學院大學學術情報リポジトリ

中世における白比丘尼集団の活動について：
日記類と『筆結の物語』を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-04-19 キーワード (Ja): 八百比丘尼, 御伽草子, 室町期の日記, 長寿伝承, 女性宗教者 キーワード (En): 作成者: 富樫, 晃 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000302

中世における白比丘尼集團の活動について

―日記類と『筆結の物語』を中心に―

富 樫 晃

論文要旨

八百比丘尼伝説に多く見られる長寿モチーフが、文献上初めて現れるのは室町時代中期の文安六年（一四四九）に書かれた三種の日記類である。これら日記類に記録されている若狭から京都へ来た白比丘尼集團の活動は、非常に断片的であり詳細な実態は不明であった。そのおよそ三〇年後に書かれた御伽草子『筆結の物語』は、丹波から京都に出てきた狸の一団が、若狭の白比丘尼と対面し問答を行うといった文安六年の白比丘尼上洛の出来事を基にしたと思われる内容である。これは創作の物語ながら、当時の日記類に記述されている実在の地名、寺院

名が登場していることや、白比丘尼が語る自らの出自やリアルな問答の内容から、作者の実際の見聞が基となっている可能性が見いだせる。そこで同時期日記類と『筆結の物語』及び八百比丘尼伝説の伝承を詳細に比較・分析を行い、室町中期における長寿を語る白比丘尼集團の活動実態と、現在伝承されている八百比丘尼伝説の基となる伝承を明らかにした。

【キーワード】「八百比丘尼」「御伽草子」「室町期の日記」「長寿伝承」「女性宗教者」

はじめに

八百比丘尼伝説に多く見られる長寿モチーフが、文献上初めて現れるのは室町時代中期、文安六年（一四四九）における『康富記』、『綱光公記』、『臥雲日件録』という同時期に書かれた三種の日記類である。これら日記に記録されている若狭から京都へ上洛した白比

丘尼集団の活動は、非常に断片的であり、詳細な実態は不明であった。そのおよそ三〇年後に書かれた御伽草子『筆結の物語』は、丹波から京都に出てきた狸の団が、若狭の白比丘尼と対面し問答を行うといった文安六年の白比丘尼上洛の出来事を基にしたと思われる内容である。これは創作の物語ながら、当時の日記類に記述されている実在の地名、寺院名が登場していることや、白比丘尼が語る自らの出自やリアルな問答の内容から、作者の実際の見聞が基となっている可能性が見いだせる。こうしたことから、白比丘尼集団の活動実態が断片的であった日記類の記述を補完し、これらを解き明かす手がかりとなりうる同時代資料として取り上げ、白比丘尼上洛時の日記類と『筆結の物語』及び八百比丘尼伝説の伝承を詳細に比較・分析し、室町時代中期における長寿を語る比丘尼集団の活動実態と八百比丘尼伝説の基となった伝承を明らかにしていきたい。

一・御伽草子『筆結の物語』での白比丘尼像

(一) 『筆結の物語』の概要

文安六年(一四四九)五月から七月にかけ、若狭国から白比丘尼という名称の長寿を語る一団が上洛してきたことが、京都市中で大きなニュースとして、人々の噂に上っていたことが同時期に書かれた『康富記』、『綱光公記』、『臥雲日件録』という三種の日記類の記述により明らかになっている。この日記類に記録された、長寿を語る白比丘尼集団上洛の出来事をモデルとして書かれた御伽草子が文安十二年(一四八〇)に成立した『筆結の物語』である。

室町期に書かれた御伽草子の作品群は、その多くが作者や成立時期等について不明とされているが、この『筆結の物語』は、筆者や成立時期が判明している希少な作品とされている。『筆結の物語』の著者と作品成立の背景については、市古貞次²⁾により、詳細な分析が行われており、市古の書に基づいて『筆結の物語』の概要について説明していきたい。

現存する『筆結の物語』写本は尊経閣文庫に所蔵されるものが唯一で、奥書には文明十二年(一四八〇)正月十一日 彝鳳老人とあり、永正十四年(二五一七)正月に十河六郎源儀重が書写した際には、「右一卷、石井前内蔵允平康長、令出家法名号彝鳳、尔時作之。」

と著者名を明らかにしている。市古はこの著者である石井前内蔵允平康長について、『見聞諸家紋』に紋所と署名が記されていることから実在の人物であるとし、「恐らく幕府に仕えた者であらう。かなりな地位にあった被官かと想像せられるが、憶測を逞しうすれば、評定所などの書記役であったのではなからうか」と推測している。白比丘尼集団が京に上洛した出来事は、この書が上程された三〇年ほど以前であるが、著者が老人を名乗っていることから、その頃石井康長は若く現役で活動していた時代であったと見られている。

『筆結の物語』の内容については、市古貞次『中世小説の研究』から、本作のあらずしを引用する。

丹波國桑田群弓削庄の狸大膳亮后轉は南枝に花一輪綻びたのをみて、初春の訪れを知り、寒さが薄らぐにつれ、狩人が襲ふから用心厳しくせよと、家の子郎等に命じた。彼の庶流に當る和泉國毛穴庄の地頭、貉式部太夫轉遠も鶯の聲を聞いて春を知り、嫡子眞猫太郎轉用を同道して、惣領の後轉の許に年賀に赴いた。四方山の話の末、露を食ひたくなり、京都正親町に三人で出かけた。西洞院邊で、最近上京した若狭國の八百歳の白比丘尼を見物の人々が群集してゐる。立ち寄つて、自分達の先祖の事、兩宮の由来、鳥居の事、歌道・入木道の心得、佛教を信ずべき事、武士の教養、四書五經、流鏑馬・犬追物の故事、禮儀作法などの話を聞いた。やがて后轉は轉遠父子と別れて丹波へ歸る途中、小野道風を祀る明神に馬上から参拝した。するとだしぬけに彼を突き落す男があるので、みると都で高名な筆結、筆ヲ結永である。馬から下りて禮をすると結永は走りよつて上毛をひたむしりにむしりとるので、「筆の毛は年内に差し上げたはずですが、さう度々御入用では、我らは何の身にもなりません」といふと、結永は「それなら御汁の身になれと」答へた。

この狸の集団が若狭の白比丘尼と邂逅し、各種の問答を行った内容の重要性について、沢井耐三⁽³⁾は、「本書にとつてもつとも重要な意味をもつと思われるのは、狸たちと八百比丘尼の間答によつて示される神仏、武道、芸道に関する知識、故実である。この問答部分は分量的に全体のおよそ四分の三、後半の殆どを占めており、この部分には主人公が狸であることの諧謔はほとんど作用していない」と論じているとおりであり、まさにこの部分が文学作品として、この作品の主題とするところでもある。ただし、本作品を、白比丘尼

上洛といった当時のニュース性を有した事柄を取り上げていることを加味し、同時期日記類を補完しうる史料として検証していくことも必要であり、これについては後述する。

なお、以下の『筆結の物語』原文の引用については、全て沢井耐三『室町物語と古俳諧―室町の「知」の行方―』（二〇一四年三弥井書店）に載る翻刻からである。

(二) 白比丘尼の上洛を記録した日記類について

『筆結の物語』のモデルとなった文安六年（一四四九）の白比丘尼上洛の出来事を記録した三種の日記類における記述は以下のとおりである。

①『康富記』室町時代の外記局官人を務めた中原康富（一三九九―一四五七）の日記であり、その記述は応永十五年（一四〇八）から康正元年（一四五五）に及んでいる。

五月二六日の条 或説云、此廿日比、自若狭国、白比丘尼トテ、二百余歳ノ比丘尼令上洛、諸人成奇異之思、仍守護召上歟、於二条東洞院北頼大地藏堂、結鼠戸、人別取料足被一見云々、古老云、往年所聞ク之白比丘尼也云々、白髮之間白比丘尼ト号歟云々、官務行向見之云々、而不可然之由巷説之間、今日下向若狭国云々

五月二七日の条 或説云、自東国比丘尼上洛、此間一条西洞院北頼大地藏堂、到法花経之談義云々、五拾バカリノ比丘尼也、同宿比丘尼二十人許在之云々

②『綱光公記』室町中期の公卿である廣橋綱光（一四三一―一四七七）の日記である。綱光は文安二年（一四四五）元服後、享徳三年

(一四五四) 参議に補せられ公卿に列せられている。日記は文安三年(一四四六)から応仁元年(一四六七)までのものである。なお、柳田の『山島民譚集二』において『唐橋綱光卿記』となっているが、廣を唐と誤記したものと思われる。

六月八日の条 晴、白比丘尼参御所云々、年八百歳之由申、怪異此事也、今日帰国云々、定篇解物歟、不吉事歟、不審沙汰有条々者也、莫言く、

六月九日の条 白比丘尼御所参出、昨日有御聞き、雖然不参云々、尤以珍重く、猶々希代事也、

③『臥雲日件録』抜尤 室町時代の臨濟宗夢窓派の僧、瑞溪周鳳(一三九二—一四七三)の日記。文安三年(一四四六)から文明五年(一四七三)に書かれた七四冊の日記があつたが、散逸し永祿五年(一五六二)惟高妙安が抄出した『臥雲日件録抜尤(ばつゆう)』一冊のみが伝わっている。

七月二六日の条 近時八百歳老尼、自若州入洛、洛中争観、堅閉所居門戸、不使容易看、故貴者出百銭、賤者出十銭、不然即不得入門也、曹源曰、昔時青岩寺側有七百歳僧、入城乞食、所謂雖魚肉皆掛干錫頭持来食之、

この文安六年(一四四九)の社会情勢について、『綱光公記』⁵⁾において、四月から七月にかけ京都で地震が頻発し、社会不安を引き起こしていたことが記録されている。

四月十日、晴、入夜大地震、驚存者也、終夜猶動、

四月十一日、晴、昼夜不断大地震、為之如何、

四月十二日、晴、天明以後大地震、此一兩日大一也、諸家築■門等頽損、東堂仏像仆給之由聞、為之如何、何不被行御祈哉、驚無極、天下怪異也、珍事く、可恐く、嵯峨尺迦山以下山摧地坼、人々少々死、將軍塚不斷鳴、如雷、以外也、猶不斷也、

六月四日、晴、地震、暁鐘程大地震、驚無極也、

七月十九日、晴、風清、残氣此一兩日興盛、(中略)先之午刻大地震、其以後連々鳴動、殊高声驚無極候者也、為之如何、一昨夜歟大地震、未数日地震不止者也、珍事く、可恐く、鳴動只如雷く、

こうした大地震が頻発する最中に八百歳を名乗る白比丘尼集団が上洛したことについて、公卿である廣橋綱光は「怪異此事也」、「不吉事歟」と記し、地震頻発による社会不安と絡めて不吉を感じ取っていたのである。しかしながら、京都市中の人々は「諸人成奇異之思」(『康富記』)のように、奇異、怪異を感じながらも、「洛中争観」(『臥雲日件録』)とあるように、争うように白比丘尼の見物に訪れており、大地震の記憶と共に白比丘尼上洛も大きな出来事として記憶に刻まれたといえよう。

また幕府の官人である中原康富の日記は、幕府、武家の動向の他、文化、芸能に関する記述も多々ある中で、白比丘尼が守護に召し上げられる等、官務に関わりのある事柄であることから、伝聞ではあるが日記に記述したものと考えられる。古老からも話を聞き、以前から白比丘尼という名が知られていることも明らかとなった。

『臥雲日件録』の筆者である瑞溪周鳳は、白比丘尼と同じ宗教者という視点から、仲間の僧との会話の中でこの白比丘尼上洛の話題が出た折の話を書き留めたものと思われ、同様に長寿を語る七百歳の僧についての話題も俎上に挙げたのであろう。

二. 御伽草子のリアリティ

(一) 史料としての御伽草子

文安六年白比丘尼上洛の出来事から約三〇年後に成立したこの『筆結の物語』は、著者の活動時期から、文安六年白比丘尼上洛時の

出来事を実際に自らが見聞、または直接見聞した人物からの伝聞による情報が作品に反映されている可能性があることが先行研究からも指摘されている。

三浦億人⁽⁶⁾は、この『筆結の物語』が十五世紀半ばの洛中を現実⁽⁷⁾に騒がせた事件に取材したものであることが知れるとし、以下のよう⁽⁸⁾に論じている。

異類物の物語内容は、ややもすれば荒唐無稽なものとされることが多いが、本話にみえる八百比丘尼の上洛と彼女との邂逅という一見奇抜な設定は、同時代の人々にとって身近な現実の事件だったのである。この時代の都人にとって、今世間ではどのような事件が起こり、周りの人間が何に興味をもち、どのような事象が流行しているのかということは、大きな関心事であった。そのような室町人の興味や知識欲を満たそうと指向しているという意味で、『筆結物語』は室町の街談巷説や人々の興味・関心の風景を生き生きと眼前に蘇らせてくれる物語であり、室町の人々にとっては、きわめて現代小説的な作品であったということができよう。

時間の流れの速い現代とは異なり、三〇年前の出来事ではあっても、当時の人々には同時代的な感覚での素材選択であったのではな⁽⁹⁾いだろうか。

御伽草子という創作物語の中にどれだけ史料性があるのかについて、齊藤研一⁽¹⁰⁾は、一九七〇年代以降に日本史研究は多様に諸史料へ目を向け始め、とくに中世史におけるライフサイクル、女性・子ども、行為・しぐさ、身体感覚、身近に存在するモノといった、それまでの歴史学では研究対象として取り上げられなかった社会史研究の隆盛であり、お伽草子もこうした日本史研究における史料論・史科学の大きなうねりの中から、あらためて発見された史料の一つといえるとしている。その中で、極めて希な例ではあるが、慶長七年の猫放し飼い令という史実が記される『猫の草子』のような作品事例を挙げている。また『赤松五郎物語』のように、史実には残るが現存しない京都の寺院名が舞台としてあげられているケースもあり、この『筆結の物語』も文安六年の白比丘尼上洛という史実が記されている事例として、その史料的な価値を検証していきたい。

(二)『筆結の物語』と同時期日記類の一致点

まず、筆者自らあるいはそれに近い人物が見聞したであろうとする根拠として、文安六年の白比丘尼上洛を記録した日記類は、個人の私的な日記であり、記録が広く知られるようになったのは『若耶群談』、『向若録』⁽⁸⁾や『若狭国志』⁽⁹⁾等の近世若狭国地誌に日記類の記事が採録された以降のことである。『筆結の物語』が書かれた時期は、これら日記類とほぼ同時期といつてよく、『筆結の物語』著者の目には当然触れなかったであろうと考えられるため、同時期日記類の記録との一致点を見いだせれば『筆結の物語』の記述内容はある程度、室町中期における若狭の白比丘尼集団がどのような活動を行っていたかを推測できる史料であるといえるのではないだろうか。そこで、『筆結の物語』と同時期日記類との一致点について見ていきたいと思う。

物語の中で、狸大膳亮后轉、貉式部太夫轉遠、眞猫太郎轉用は京都正親町に出かけた際、西洞院の辺りにて若狭の八百歳の白比丘尼を見物する群集と出会う。自分たちも白比丘尼を見ようと堂に立ち寄つてみたという原文の描写は以下のとおりである。

西洞院辺にあたり、貴賤群集して、人は大井の市をなす。何事哉らんと尋ぬれば、衛門七申、いまたしろしめし候はず哉、わかさより白比丘尼と申て、年八百にあまると申人、上洛仕候て、大みねの地藏堂に、此ほどわたり候を、京わらんへか、こそりて見候也とぞ申ける。三人の物、申やう、いまた日もたかし、いさ立よりてみてゆかんとて、彼堂へそ入にける。見れば、よのつねの八十、九十になる人のことし。さしたる事なしとて、立帰えらんとする処に、ひくに、是なるはいくつの人そとの給ふ。

○白比丘尼の京都での所在

『筆結の物語』の記述では、若狭から来た八百歳の白比丘尼の京都での所在が、「西洞院辺大みねの地藏堂」とされており、『康富記』五月二六日条に見える「二条東洞院北頼大地蔵堂」とは若干異なるが、翌五月二七日条の東国比丘尼の滞在先である「一条西洞院北頼大地蔵堂」は、一条通りと西洞院通りが交わる場所にあった「大峰寺」であり、こちらとは一致する。『康富記』五月二六日条は、或説とあるように伝聞によるものであり、比丘尼の年齢も他の日記類と異なり、伝聞が間違つた情報に基づくものなのかも

しれない。

○京都市中の見物人

『筆結の物語』では、白比丘尼を見学する群衆を「貴賤群集して、人は大井の市をなす」としており、『臥雲日件録』では「洛中争観、堅閉所居門戸、不使容易看、故貴者出百錢、賤者出十錢、不然即不得入門也」と同様に争うように見物人が集まっている情景を描いている。

○白比丘尼の外観

『筆結の物語』での八百歳の比丘尼の容姿が「よのつねの八十、九十になる人のことし」と何の変哲もない老婆であるとの描写から、『康富記』の古老が語る「白髮之間白比丘尼ト号歟云々」という白髮の老女という外観の比丘尼という一致点が見いだせ、また白比丘尼名称の語源との関連性もうかがえる。

以上、『筆結の物語』と史実を伝える同時期日記類との間には、いくつかの一致点があり、実際の出来事をベースに物語が書かれているということが想定できるのではないか。

三 『筆結の物語』白比丘尼像の検証

前述したように『筆結の物語』と史実を記録した同時期日記類の記述には多くの一致点が見いだせたが、同時期日記類に書かれている記述での白比丘尼像は非常に断片的なものであり、全体像は不明であった。しかし、『筆結の物語』においては、白比丘尼の出自、長寿となった食物、呼称について、白比丘尼自らが語っている場面があり、これらについて史料等を用いながら検証を行っていきたい。

(一) 長寿比丘尼の出自等について

狸大膳亮后轉、貉式部太夫轉遠、眞猫太郎轉用の三匹の狸に、白比丘尼の先祖がこの狸たちと同じ五位藏人長轉であると語った後に、自らの出自について以下のように語っている。

さて、みつからは、いかなる物□かおもひ給ふ。囊祖長轉、挽子ふね着岸の奉行を承、若狭国吉昌庄、小浜の浦に下向あり。ひなのすまひのつれづれさに、遊女やあると問給ふ。其比の、ほしのまへとて、ならひナキテウあり、本は禁中に候て、化子命福と申、申せし人なり。二月の初午なれや、みあれするいなりの杉のもとはをたおらんと、三の御山にいられしに、いかなる人のしわざそや、むかとはかしたてまつり、商人にうりまいらせしか、今、この津にて、なかれをたておはします。是こそと申さは、さらは其をとてむかへとり見給へはき、梅か香を桜の花にほわせて、柳かえたかにさかせても、是にはいかてまさるへき。或又、□にへいし□ま□城にきて、ひしやモンのいもと、吉祥天女□あいたてまつる哉らんと、心にうたかい給ひける。かくて鴛鴦のふすまの下に、比目の契をなし給ふ。其しうしんのすゑ、いまのみつからは是なり。然に長轉事とけて都にのほり給ひ、いく程なくて世をはやふし給ふほとに、みなし子となりて候なり。母、みすからはらみ給ひし時、枸杞といふ草ヲ、毎日ふくし給ふ、是即、不死の薬と成て、既に九百年におよふよわいをたもち侍り。さるほとに、もと□長命女と世の人申しけり。其後、熊野まふての時、ゆらの寺にまいり、開山の御弟子に成ければ、又諸人、若狭の白比丘尼といふなり。近比より、八百比丘尼とよふ人も侍り。

白比丘尼の父となる長轉という人物について、白比丘尼はこう語っている。「囊祖長轉、挽子ふね着岸の奉行を承、若狭国吉昌庄、小浜の浦に下向あり。」この「挽子ふね」について、沢井耐三『室町物語と古俳諧―室町の「知」の行方―』翻刻の注釈によると「蝦夷の船。北方からの異国船」としている。『福井県史通史編2 中世』には、寛正四年（一四六三）六月に、小浜湊に奥州十三湊と関係のあるように思われる十三丸という大船が入港しており（「政所内談記録」、戦国期ころには小浜湊と宇須岸（北海道函館市）の間に毎年三回の商船往来があり、往航に上方の産物を積み、復航に蝦夷地産物、特に昆布を積んだという（函館図書館蔵「新羅之記録」）記録があり、若狭小浜と蝦夷地である北海道結ぶ日本海航路の船を指したものでないだろうか。

この奥州十三湊については、若狭小浜の「羽賀寺」を再建した安倍（安東）氏の本拠地である。安倍（安東）氏は中世期において、今の秋田県北部から青森県全域、北海道南部までを勢力圏とし、津軽十三湊を本拠とする活発な貿易や水軍活動で知られていた。「羽賀寺縁起」によれば、遠敷郡羽賀寺の堂舎は永享七年（一四三五）に焼失し翌八年四月本堂は建立されたが、奥州十三湊の「日之本將軍」安倍康季が莫大な金を奉加しており、文安四年（一四四七）十一月に本尊を遷座したとある。（羽賀寺文書一五・五五号）安倍（安東）氏はこうした小浜の宗教のバックアップを行っていたと共に、若狭小浜から北海道までの日本海交易を取り仕切り、その航路船は、北陸、関東、南東北までの活動拠点をカバーする若狭小浜の熊野比丘尼達にとつて、これら拠点への移動手段として使われていたと考えられることから、白比丘尼の父を蝦夷航路の関係者とする設定としたのではないか。また、「羽賀寺」が文安四年に安倍氏の尽力により再建されたとはいっても、まだまだ諸費用が莫大にかかる状況にあったことが、二年後の文安六年、小浜からの白比丘尼集団上洛による勧進活動に繋がっている可能性もある。

（二）長寿となった由来の食物

後世の八百比丘尼伝説では、比丘尼の長寿の由来となった食物として、「人魚の肉」⁽¹⁾がこの伝説の象徴として語られている。しかし、この『筆結の物語』においては、「母、みすからをはらみ給ひし時、枸杞といふ草ヲ、毎日ふくし給ふ、是即、不死の薬と成て、既に九百年におよぶよわいをたもち侍り。」と比丘尼の口から語られるように、枸杞（くこ）という薬草であり、現代の料理にも使用される食材である。

『神農本草経』⁽²⁾という一世紀から二世紀にかけ成立した中国の本草書では、三六五種の薬物を上品・中品・下品に分類しており、その中で枸杞は無毒で長期服用が可能な養命薬である上品とされ、「枸杞、一名杞根、一名地骨、一名苟忌、一名地輔、味苦、寒。平沢に生ず。五内、邪氣、熱中消渴、周痺を治す。久しく服すれば、筋骨を堅くし、身を軽くし、老に耐ゆ」と不老の薬効が記されている。

また、撰者丹波康頼により九八四年、朝廷に献上された日本最古の医薬学書である『医心方』⁽³⁾巻二六第一「枸杞の効用と服用方法」には、枸杞にまつわる話として、「若い女が老女を棒で叩いていた。それを見ていた者が若い女に理由を尋ねると、叩いていた老女は

自分のひ孫であり、家の良薬を飲ませようとしたがいうことを聞かなかったために、こんなに古い、病で歩くことも不自由になったため、叩いて薬を飲まそうとしたと答えた。若い女の年齢は三七三歳であった。」と記され、枸杞が不老長寿の妙薬として、古くから知られた存在であったことを示している。

後世の八百比丘尼伝説に見られる異郷訪問のモチーフに付随した「人魚の肉」や「九穴の貝」といった長寿由来の食物が、まだこの時期の長寿を語る比丘尼の由来には現れておらず、古くから知られた不老長寿の妙薬であった枸杞が由来とされたのではないか。また、根井淨が「このような長寿を得るといふ霊薬は、(中略)古代以来の神仙思想に基づく仙薬に当たるものである。しかし、一般民衆が歓迎した薬は、廻国遊行の民間宗教者が説く神仏の霊験に基づく薬であった。」と論じているが、こうした修験者等の廻国宗教者集団が持ち伝えていた薬と同様、若狭の白比丘尼集団が不老長寿の薬として枸杞を持ち伝えていたのではないだろうか。

(三) 長寿比丘尼の呼称

『筆結の物語』では、比丘尼が自らの呼称を「若狭の白比丘尼といふなり。近比より、八百比丘尼とよふ人も侍り。」と語っており、『康富記』、『綱光公記』に見える「白比丘尼」という呼称や『綱光公記』、『臥雲日件録』の八百歳の比丘尼が語源であろう「八百比丘尼」という呼称と一致する。この「八百比丘尼」という名称が文献に初めて現れたのは、寛文年間(一六六一～一六七三)に成立したと推定されている桜井曲全子の『若狭国伝記』⁶⁵⁾である。「八百比丘尼ノ窩」の項には「此窩空印寺ニアリ、伝テ云、往昔小浜ノ人十人計登舟泛江流、(中略)主人招客進席、其家内ノ粧觀整玉瓦金、既而饗膳出、屠人如人肉ナル物ヲ調シテ進之、僉甚恐テ不食、漸定風浪、乗舟旧里帰、一人彼肉ヲ袖ニシテ女子アリ、喰此肉而后無病長寿ニシテ、保八百歳、故時人号八百比丘尼、(下略)」と若狭小浜で八百比丘尼が居住した岩窟の遺構を説明したものである。文安六年の同時期日記にも八百比丘尼の語源となる自称八百歳の比丘尼の記録はあるが、八百比丘尼の呼称は使われておらず、もっぱら白比丘尼という呼称が使われている。その二〇〇年後の若狭の地誌に初めてその呼称が使われたわけであるが、『筆結の物語』の記述により、一四〇〇年代中期にはすでにこの「八百比丘尼」という呼称が一般に使われていた事が判明した。

四、白比丘尼と狸の問答について

市古貞次『中世小説の研究』での『筆結の物語』のあらすじでは、白比丘尼と狸たちとの会話には問答形式が取り入れられ、両宮の由来、鳥居の事、歌道・入木道の心得、仏教を信ずべき事、武士の教養、四書五経、流鏑馬・犬追物の故事、礼儀作法についての狸たちの質問に白比丘尼が答える形で狸たちに知識を授けている。この知識内容については、市古は『筆結の物語』の著者である石井前内蔵允平康長（出家法名号彝鳳）の知識に依拠していると指摘している。

また、沢井耐三⁽⁶⁾は、「問答の部分は武家故実の色合いが濃く、物語の流れを辿る娯楽性とは異質の内容となっている」としている。石井康長が市古の推測のとおり、武家として評定所などの書記役であったとしたら、それは武家故実等の諸事に通じた当時の知識階級ということであり、その豊富な知識が『筆結の物語』の問答に生かされているといえるだろう。

ただし、その見方とは別に、当時上洛し、筆者が実際に見聞したのであろう白比丘尼自身の知識が反映されているという可能性はないのだろうか。その根拠として、後世の八百比丘尼伝説に見る八百比丘尼の長寿の証明として、源平合戦の実況見聞を語り、地方の活動拠点においては、自らを祖先とする特定の家を設け、かつてのその地の歴史を語る⁽⁷⁾などの理由付けをしてきたが、まだそうしたやり方が出来ていなかった室町中期において、白比丘尼の長寿を証明するのは、長い年月を生きてきたことに伴う蓄積された諸事に関する膨大な知識ではなかっただろうか。それゆえ、白比丘尼集団が上洛した際には、見料を取って、単なる見世物となっていただけではなく、『筆結の物語』にあるような問答形式ではなくとも、対談という形でいろいろな知識を見者に授けていたのではないかと思われるからである。また『筆結の物語』が書き上げられた時期は、まだ白比丘尼見聞の記憶が生々しく残っている人々も多くおり、創作といえども著者は実際の白比丘尼の談義内容を参考としていたのではないかと考えられる。その実証事例として、『筆結の物語』の問答の中からいくつか取り上げてみたい。

(一) 神道及び伊勢神宮について

『筆結の物語』では、神道及び伊勢神宮に関する問答がいくつかなされている。「轉遠、問、神はいつれへ詣候て可然哉。尼の云、神をほうやまい奉りて、とをとかり参せよと見えたり。されは、しやうしんけつさいもせずして社参、拜宮などすへからず、中にも伊勢両宮は此国の御あるしにてましますは、ゆるかせに存へからず。」との問答から、伊勢神宮の建立された年、祭神等についての問答が続く。

若狭小浜の比丘尼と神道及び伊勢神宮との関わりについては、三重県鈴鹿市平野町には、若狭から伊勢参拜に来た八百歳の比丘尼がここで亡くなったという比丘尼塚という八百比丘尼葬地の塚にまつわる伝説がある。また若狭小浜の神明宮は、一四〇〇年頃に九州豪族の菊池氏が開いたとされる。『郡県志』の中で「後瀬の連峰にして西南に在り、山腹に伊勢内外の神を祭る。また熊野十二所権現の社あり、その形は一箇の社で横長に造り、左右それぞれ六所を祭り、その中間に役小角の像を安置す。或いは役行者という。大和国葛城の里民なり、壮にして家を棄て葛城山に入るといふ。相伝う。大宝二年九月七日、小角五色の雲に乗りてこの山に来る。事後この像を刻んで安んずと、今の山伏は小角の末徒なるが故に、国中の山伏これを尊崇す。凡そ国中の山伏五六十人あり、このうち金襴地法印五人あり、都院号の者二十七人これあり」との記載があり、伊勢神宮の神々とともに熊野の神々も祀られており、修験者の集まる場所であった。

この小浜神明宮は、『若狭国守護代記』卷五「元和五年（一一一九）未、今年小浜の西、青井白玉椿に小社をはじめて建立す。是れ即ち同所神明の神主菊池某が計ひなり。是は、去る頃より比丘尼の形を現して舞遊び、人にゆきあいては、かき消すように失ぬ。この所は昔、八百比丘尼の住跡なれば定めてその靈魂にてあるべしとて小社を建て、八百比丘尼の宮と名付く」とあるように、以前から比丘尼が居を構えていた場所で、この八百比丘尼の宮は現存している。

このように、熊野比丘尼たちが若狭小浜から伊勢神宮への参拜を行っていたことや、神明宮を拠点としていたことから、当然のことながら比丘尼たちは神道や伊勢神宮の知識を持っていたと考えられる。また、全国の廻国宗教者たちが中世期に伊勢神宮周辺の橋を普請するため勧進を行っていた事実などから、廻国の宗教者たちは伊勢神宮に崇敬の念を持っており、その多くが神道及び伊勢神宮に関する知識を有していたであろう。

(二) 法華(花) 経談義について

『筆結の物語』では法華(花) 経に関する問答もなされている。

問、法花経に無智人中莫説此経とあり。是、責伏にてあるへしか。答、不可なり。近江の坂本にて、猿引知識の法花経を講し侍るを聞は、此文なり。無智なる人の中にて、此きやうをとく事なかれとよみて、あふきをはたと打て、すわ智者になしたりといへり。此点にて責伏なり。又、あるかくしやうの談儀を聴聞し侍れば、無智なる人の中に、あへて此経をとけとよみ給へり。是は惣受なり。

この問答の中に、回答者たる比丘尼が各宗の法花経談儀にふれていることは、『康富記』五月二七日条の「自東国比丘尼上洛、此間一条西洞院北頼大地蔵堂、到法花経之談義云々、」にあるように、当時盛んに諸宗派において法華経談義が行われていることを示している。当然ながら、若狭や東国の比丘尼集団は、こうした法華(花) 経談義を行うための膨大な知識を有していたはずで、それがこの問答に反映されているのではないだろうか。

(三) 武士の教養、故実について

『筆結の物語』の問答では、武士の教養、流鏑馬・犬追物の故事、礼儀作法等、武家のしきたりや故実といったものも取り上げられており、およそ女性宗教者たる比丘尼の知識にはそぐわないように感じられる。実際、問答の中で、これらに関するものは「女なのでくわしくしらず」という事を前提に回答している。この部分については、市古、沢井等の先行研究で、著者である石井前内蔵允平康長自身の武家知識による創作としている。

だが、熊野比丘尼に代表される女性宗教者たちが、全く武士の故実等について知識を持ち合わせていなかったのだろうか。各地では八百比丘尼による開基伝承を持つ寺社が、その開基の際に、現地の有力な武士に協力を仰ぐなど武家との接点があったことを示してい

る。例えば、福島県喜多方市塩川町金橋字金川にある「金川寺」⁽²⁰⁾では、「昔若狭國小濱より一人の老尼來たりて勝地を相し、この村の地頭石井丹波守に請て一字を建立す、地名に因て金川寺と號せりみづから彌陀の靈像を刻て本尊とす、長二尺六寸あり住職年を経て八百歳の齡を保てり、因て世にこれを八百比丘尼と云、別に法諱ある事を知るものなし」と、地元有力者の武家である石井氏の協力を得ている。

また、新潟県の佐渡羽茂大石にある「熊野神社」⁽²¹⁾は、鎌倉時代末期元享二年（一三二二）の年号が入った古い棟札が残っており、その建立の寄付を行った人物として、羽茂領主で武家の本間氏一族が名を連ねているのとともに、「禪定比丘尼妙道は用途十貫」と書かれ、熊野比丘尼が建立の寄付をし、本間一族と深い関係にあったことがわかる。この、「禪定比丘尼妙道」について、『佐渡神社誌』大正一五年には、「村社熊野神社」由緒として、「創立年代未詳、口碑に禪定比丘尼妙道（當地田屋の八百比丘尼の法名なり、往昔比丘尼は八百歳の長寿をたもちしより斯はいふなり）の創立大同三戊子年三月社殿再建の由傳ふるも社藏の棟札は弘安七年以前のものは書體祥ならず」として記されている。この熊野神社の神主は、「田屋」と呼ばれる一族で、八百比丘尼の生家であるという伝承が残されており、また田屋家独自の伝承として、「比丘尼妙道ハ何国之産、何年間之生年共不知、往年藤井甚太郎ニ仮住居諸国ヲ遍曆シ、佐渡江婦住之時甚太郎六代之孫ニ対面スト傳説アリ。此故ニ、是ヲ郷里之人今ニ八百比丘ト唱フ」とあり、熊野比丘尼と田屋家の深い関係性が理解できる。またこの一族は羽茂飯岡にある佐渡國一宮「度津神社」の境内末社である「飯岡八幡宮」の流鏑馬神事を取り仕切っていることから、かつて神事に関わる武家のしきたりや故実についても、熊野比丘尼はある程度の知識を有していたのではないかとの推測が出来る。また、文安六年の上洛時には実際に見者にある程度の知識を伝えていた可能性も考えられよう。

以上、『筆結の物語』の問答に関し、①神道・神社、②法華（花）経談義、③武士のしきたり、故実についての考察を行ってきた。これらの問答については、ほぼ全てが著者である石井前内藏允平康長自身の知識のよるものと解釈されてきたが、当時の熊野比丘尼たちの知識教養レベルは相当に高いといえ、実際の比丘尼との問答を参考に書かれた部分も多くあるのではなからうか。

五、『筆結の物語』と同時期日記類に見る白比丘尼集団の特徴

文安六年（一四四九）の若狭から上洛した白比丘尼集団の出来事を題材とした『筆結の物語』、史実を記録した同時期日記類や八百比丘尼伝説の伝承を比較考察し、その史料性について検証を行った。その結果、白比丘尼集団の活動が断片的であった同時期日記類の記録を『筆結の物語』が補完できる程度の史料性があることがわかってきた。これら各種史料から、室町中期における長寿を語る若狭小浜の白比丘尼集団の活動の一端が以下のように見えてくるのではないか。

（一）『筆結の物語』と同時期日記類に見る上洛した宗教者集団の活動

若狭から上洛した白比丘尼集団を記録した日記類については、柳田國男の「山島民譚集二 第六 八百比丘尼⁽²⁾」にも、以下のように取り上げられている。

何となれば比丘尼が山城の京に来て世人に持て囃されたのは正しく寶徳元年（文安六年 西曆一四四九）の夏である。此事實は當事の記録に三種まで見えて居る。先ず第一に臥雲日件録の七月二十六日の條には近時八百歳の老尼若州より入洛す、洛中争ひ觀る、居る所の門戸を堅く閉ぢ人をして容易に看せしめず、故に貴者は百錢を出し賤者は十錢を出す、然らざれば則ち門に入るを得ざる也とある。次に唐橋綱光卿記の六月八日の條には、白比丘尼御所に参る云々、年八百歳の由申す、怪異の事也、今日國に歸る云々、定めて篇解の物か云々、不吉の事也、不審の沙汰條々ある者也、莫ふ言れくとある。此を以て見れば八百歳は證人の無い自稱であつて、殊に比丘尼の身を以て御所に参るに至つては頗る保守派の人々の同情を失ふ所以であつたと見える。更に中原康富記の同年五月二十六日の記事には左の如く出て居る。曰く或は云う此二十日頃若狭國より白比丘尼とて二百餘歳の比丘尼上洛せしむ。諸人奇異の思を為す、仍て守護召上ぐるか、二条東洞院北頬の大地藏堂に於て鼠戸を結び人別に料足を取り一見せらる云々、古老云く往年聞く所の白比丘尼なり云々。白髪なるの間白比丘尼と號する歟云々。官務行向ひ之を見る云々、然るべからざる由巷説あるの間今日若狭國に下向す云々。歸

ると謂って中々歸らなかつたのである。

同時期の日記類に記録された白比丘尼と称する若狭から来た集団について、柳田は『康富記』五月二六日の記事で、五月二〇日に若狭から白比丘尼の集団が上洛し、本日若狭に帰るとの記述があるが、『綱光公記』六月八日の記事でも今日帰国とあることから、帰るといって中々歸らなかつたとして、同一の白比丘尼集団が長期間京都に滞在していたことを示唆している。これら白比丘尼集団が柳田説のとおり五月から長期滞在していたのか、あるいは『康富記』、『綱光公記』の帰国記事にあるとおり、若狭小浜の異なる白比丘尼集団が入れ替わり上洛していたのであろうか。『康富記』には五月二十日に上洛し一週間で帰国予定との記述があるが、勸進目的のため、女性の足で長駆若狭国から京都まで来て、一週間程度で帰国するのはあまり効率のよいことではなく、また、『康富記』五月には「結鼠戸、人別取料足被一見云々」、『綱光公記』七月では「堅閉所居門戸、不使容易看、故貴者出百錢、賤者出十錢」と同様な見世物興行的行動が見受けられることから、短期間で長寿の比丘尼が別の人間に交代することは見学した市中の人間に不信感を持たれる可能性がある。そのため、柳田の言うとおり、長期間滞在している同一の集団であると考えられるのではないか。ただし『康富記』五月二六日条にある「古老云、往年所聞く之白比丘尼也云々、白髮之間白比丘尼ト号歟云々、」とあるように、白比丘尼集団の上洛は今回が初めてではなく、同一集団であるかどうかは不明であるが、かなり以前から上洛し活動していたようである。

『康富記』に若狭の白比丘尼集団が記録された五月二六日の翌日、五月二七日の条にある「東国比丘尼上洛」について、『拾権雑話⁽²³⁾」で「宝徳元年五月若狭白比丘尼入洛、与東国比丘尼偶会相語云々」との記事があり、若狭の白比丘尼集団と異なる集団であるとしている。根井浄⁽²⁴⁾は、当時の上洛した比丘尼集団について以下のように論じている。

東国の比丘尼とは、関東、もしくは東北の比丘尼と推定されるが、その東国比丘尼の『法華経之談義』とは法華経之説教祭文であったことは疑いなく、具体的な宗教活動が知られるのは貴重である。さらに二〇名あまりの比丘尼集団であったことは注目される点で、このような比丘尼集団が各地に存在し、それぞれ京都に集まったことを示している。確かに『看聞御記』嘉吉元年（一四四一）五月

一六日条にも「異形之比丘尼、自奥州上洛、此間徘徊云々」とあり、はるばる奥州から上洛した比丘尼もあった。この比丘尼は奥州名取神社の熊野比丘尼であつたとも考えられるが、総じてこのような様々な伝説と特色を持つ比丘尼とその集団が室町時代に横行していたことが認められる。

この根井の論に見える奥州名取神社の熊野比丘尼については、「名取の老女」⁽²⁴⁾という名取にある熊野神社を勧請した老女の伝説があり、それを基にした『熊野堂縁起』が永正二年（一五〇五）に書かれている。小林健二は、『熊野堂縁起』がその記述から永正二年以前に成立したと考えられるとし、また寛正五年（一四六四）に演じられた能「護法」と『熊野堂縁起』がともに、それ以前に存在したであろう「原名取熊野縁起」が原話となつてしていると指摘している。つまり、『康富記』に記録された東国比丘尼は、この「原名取熊野縁起」を持ち伝えた集団の可能性が大いにあるのである。この時期、多種多様な宗教者集団が上洛し勧進を行つていたことが記録に残っているが、多くの勧進を目的とした宗教者集団が京都に集まる中で、「名取の老女」や「八百歳の長寿者」といった奇瑞譚を持つて自らをアピールする集団が京都の民衆の耳目を集め、それが大いに勧進の成果になつたことは想像に難くない。

二. その他の特徴

○長寿比丘尼の由来譚として、は、後世の八百比丘尼伝説に見られるような「異郷訪問のモチーフ」を伴うものではなく、長寿になる由来の食物も「人魚の肉」や「九穴の貝」ではなく、「枸杞」という現実存在する薬草である。

○「白比丘尼」は文安六年より遙か以前に呼称されていたが、「八百比丘尼」という呼称も白比丘尼上洛時以降には広く使われていた。○白比丘尼の長寿の証明として、後世の八百比丘尼伝説では遠く源平合戦の見聞を語り、また各地の活動拠点の家の先祖を名乗り、地元でかつて起こった歴史的事件等を語つたりしていたが、室町中期にはまだ定着しておらず、白比丘尼の豊富な故事来歴等の知識を長い年月に蓄積したことを長寿の証明に換えていると考えられる。

○上洛した白比丘尼は、ただの見世物だつたわけではなく、豊富に知識の基づいた講話、談義もこなしていたと思われる。

六、まとめ

文安六年の白比丘尼集団上洛という出来事は、当時いくつかの日記類に記録され、近世中期の若狭国地誌である『若耶群談』、『向若録』や『若狭国志』にも採録という形で八百比丘尼の事跡として取り上げられていることから、この時の白比丘尼が、近世に入ってから八百比丘尼と比定され、後の八百比丘尼伝説に繋がることとなっていくが、これら日記類の記録のみでは白比丘尼の活動内容は断片的なものであり、実態を掴めていなかった。今回、日記類と同じ白比丘尼上洛の出来事を題材とした御伽草子『筆結の物語』を取り上げ、創作の中から史料性のある事象について検証した。その結果、八百比丘尼伝説の前史ともいえる長寿比丘尼伝承の萌芽となると思われるいくつかの特徴が見えてきた。

この同時期の日記類以降、八百比丘尼伝説に関わる文献記録はしばらく途絶えており、次の記録は、およそ一五〇年後の林羅山『本朝神社考』²⁶となる。この『本朝神社考』では、以下のように白比丘尼の長寿の由来として異郷訪問のモチーフと人魚の肉という、その後の八百比丘尼伝説の定番となるストーリーが始めて述べられている。

余が先考嘗て語つて曰く、伝へ聞く、若狭国に白比丘尼と号する者あり。其の父一旦山に入り異人に遇ふ。与に俱に一處に到る。殆ど一天地にして別世界なり。其の人一物を与へて曰く、是れ人魚なり。之を食ふときは年を延べ老ひずと。父携えて家に帰る。其の女子迎へ歛んで衣帯を取る。因て人魚を袖に得て、乃ち之を食ふ。女子寿四百余歳、所謂白比丘尼是れなり。余幼齡にしてこの事を聞いて忘れず⁴

つまり、文安六年（一四四九）以降一五〇〇年代後半にかけての間に、異郷訪問のモチーフと人魚の肉が結びついた八百比丘尼伝説のストーリーが作られてきたことになる。この空白の一五〇年間の中で、どのようにして、このストーリーが形作られてきたのか、今後の課題といえよう。

注

- (1) 文安六年（一四四九）七月二八日に宝徳に改元されたため、日記に記述された白比丘尼上洛時は文安六年となる。
- (2) 市古貞次『中世小説の研究』東京大学出版会 一九五五
- (3) 沢井耐三「狐と狸、中世的相貌の一面」『絵巻・室町物語と説話』（説話論集／説話と説話文学の会編・第八集）清文堂出版
- (4) 小浜市郷土研究会『八百比丘尼伝説資料集』〔改訂〕小浜市郷土研究会 一九九一 記録文献の引用はこれによる。
- (5) 遠藤珠紀、須田牧子、田中奈保、桃崎有一郎「綱光公記―文安六年（宝徳元年）四月～八月記―」『東京大学史料編纂所研究紀要』第27号 二〇一七
- (6) 三浦億人「異類幻想…筆結物語」をめぐって』『お伽草子百花繚乱』笠間書院 二〇〇八
- (7) 齊藤研一「史料としてのお伽草子 研究史覚書」『お伽草子百花繚乱』笠間書院 二〇〇八
- (8) 千賀源右衛門『若耶群談』寛文年間（一六六一～一六七三）、『向若録』寛文二年（一六七二）「余往歳在国史編輯之席、閱中原康富家記、曰宝徳元年五月若狭白比丘尼入洛、與東国比丘尼偶會相語、由是觀之則白比丘尼之名昭著于前世」
- (9) 小浜藩官撰による最初地誌。稲庭正義が、領内を巡回し寛延二年（一七四九）に完成させた。「或云中原康富記曰宝徳元年五月若狭白比丘尼入洛与東国比丘尼偶會相語矣、又日件録曰宝徳元年己巳七月二十六日赴清水定水庵定水庵主曰近時八百歳老尼自若州入洛中争觀堅閉所居門戸不使容易看、故貴者出百錢賤者出十錢不然即不得入門也」
- (10) テウ 漢字は女偏に農 遊女の別名称である。
- (11) 現在各地に伝承されている八百比丘尼伝説の内、長寿由来の食物として多くの事例が「人魚の肉」とされている。続いて多いのが、「九穴の貝」と称される貝類であり、枸杞は現在の伝承からは確認されていない。
- (12) 森立之郭秀梅『本草経考注』（修訂版）学苑 二〇二〇
- (13) 榎佐知子現代語訳『医心方』 卷二十六 仙道篇 ―医心方1期 筑摩書房 一九九四
- (14) 根井浄「廻国の比丘尼」仏教民俗学大系2『聖と民衆』名著出版 一九八六

- (15) 若狭の郡境・国高・名所・土産名物・国主略譜・沿革・社寺・山川・名所等からなり、若狭に関する江戸時代最初の地誌である。
- (16) 沢井耐三『筆結の物語』―室町武人の知識とユーモア―『室町物語と古俳諧』室町の「知」の行方』三弥井書店 二〇一四
- (17) 富樫晃「八百比丘尼伝説の成立について―江戸初期の若狭小浜を中心に―」『口承文芸研究』第四十三号 日本口承文芸学会 二〇二〇
- (18) 牧田忠左衛門近俊『若狭郡志』元禄六年（一六九三）
- (19) 若狭の最初の守護ともいえる稲葉時貞から、宝暦十三年に小浜藩主となった酒井忠貫までの若狭歴代の守護・大名・藩主をあげ、その事歴を年譜風に著したものである。一七〇〇年代半ばに書かれたと見られるが、著者については不明。
- (20) 富樫晃「東日本地域の寺院における八百比丘尼縁起の成立について」『口承文芸研究』第四十四号 日本口承文芸学会 二〇二一
- (21) 富樫晃「八百比丘尼伝説」の研究―佐渡の伝承と「田屋」をめぐる―『口承文芸研究』第三十九号 日本口承文芸学会 二〇一六
- (22) 『定本柳田集第二十七卷』筑摩書房 一九七〇年 なお、『山島民譚集』が一九一四年に発刊され、本稿は『山島民譚集』二として発刊される予定だったが、未発刊となり、柳田の死後に『定本柳田集』に収録された。本稿が書かれた年代は大正期から昭和初期と考えられる。
- (23) 木崎外字窓が、宝暦七年（一七五七）から町内・領内を巡回して古老から聞き取りするなどして、七年後に完成させたものである。
- (24) 宮城県名取市高館熊野神社の勧請にまつわる説話である。小林健二「名取老女熊野勧請説話考―「名取熊野縁起」をめぐる―」によると、概要としては「昔、名取郡に熊野権現を信仰する巫女がいた。巫女は毎年熊野への参詣をしていたが、年老いて熊野へ行くことが出来なくなったため、保安四年（一一二三）名取に熊野三山を自ら祀り参詣していた。後日、陸奥下向予定の熊野の山伏が、「陸奥に下るならば名取に立ち寄り老女に渡し物をせよ」との霊夢を見る。枕元には柳の葉に「みちとをしとしもいつしかおいにけりおもおこせよわれもわすれじ」と虫喰い文字の神詠があった。山伏は直ちに名取に向かい老女に霊夢と神詠を伝えると、老女は名取の熊野三社に山伏を案内し、祭文を唱え幣帛を捧げた。すると熊野権現の使者、護法善神が現れ、老女を祝福し消えた」というものである。
- (25) 小林健二「名取老女熊野勧請説話考―「名取熊野縁起」をめぐる―」『国文学研究資料館紀要』第八号 国文学研究資料館 一九八二
- (26) 『本朝神社考』寛永十五年（一六三八）から正保二年（一六四五）の間に書かれたとみられる。巻六 都良香の条に林羅山が一五九〇年頃の幼少期に聞いた話としている。

参考文献

- 市古貞次『中世小説の研究』東京大学出版会 一九五五
- 遠藤珠紀、須田牧子、田中奈保、桃崎有一郎「綱光公記―文安六年（宝徳元年）四月〜八月記―」『東京大学史料編纂所研究紀要』第27号 二〇一七
- 小浜市郷土研究会『八百比丘尼 伝説資料集』〔改訂〕小浜市郷土研究会 一九九一
- 小林健二「名取老女熊野勸請説話考―「名取熊野縁起」をめぐる―」『国文学研究資料館紀要』第八号 国文学研究資料館 一九八二
- 斉藤研一「史料としてのお伽草子 研究史覚書」『お伽草子百花繚乱』笠間書院 二〇〇八
- 沢井耐三「筆結の物語―室町武人の知識とユーモア―」『室町物語と古俳諧・室町の「知」の行方』三弥井書店 二〇一四
- 沢井耐三「狐と狸、中世的相貌の一面」『絵巻・室町物語と説話』（説話論集／説話と説話文学の会編・第八集）清文堂出版 一九九八
- 富樫晃「八百比丘尼伝説」の研究―佐渡の伝承と「田屋」をめぐる―『口承文芸研究』第三十九号 日本口承文芸学会 二〇一六
- 富樫晃「八百比丘尼伝説の成立について―江戸初期の若狭小浜を中心に―」『口承文芸研究』第四十三号 日本口承文芸学会 二〇二〇
- 富樫晃「東日本地域の寺院における八百比丘尼縁起の成立について」『口承文芸研究』第四十四号 日本口承文芸学会 二〇二一
- 富樫晃「若狭小浜の寺社における経済活動としての八百比丘尼伝説の利用―小浜発八百比丘尼伝説の各地への伝播とその影響について―」『口承文芸研究』第四五号 日本口承文芸学会 二〇二二
- 日本文学研究資料刊行会編『お伽草子』有精堂出版 一九八五
- 根井浄「廻国の比丘尼」仏教民俗学大系2『聖と民衆』名著出版 一九八六
- 浜野安則「筆結物語」にみえる小笠原氏―お伽草子に描かれた武家故実のパロディー―『信濃』第67巻第8号 信濃史学会

二〇一五

○『福井県史』通史編2 中世 福井県 一九九四

○三浦億人「異類幻想…『筆結物語』をめぐって」『お伽草子百花繚乱』笠間書院 二〇〇八